

地形図弓削島を読む

松 永 直 也*

Consult Topographical maps Yuge Island

Naoya Matsunaga*

1. はじめに

弓削島「近世は上弓削・下弓削の両村に分かれて今治藩に属し、海の宿駅として本陣が置かれた。」これは弓削島についての記述である。更に続く、「明治以後は船員としての出稼ぎ、大陸方面への移住が盛んとなり、明治34年には弓削海員学校を設立した。」とある。

本校は2001年（平成13年）に創基100周年を迎え、巣立った卒業生は6,058名である。

卒業生を育んだ弓削商船、そして弓削商船を育んだこの弓削島を国土地理院の刊行する地形図から年月を遡り空中写真も参考にしながら弓削商船創立時の弓削島を考察する。

2. 旧版地形図

弓削島の地形図を遡ると明治30年測図同32年製版の図名「百貫嶋」と明治31年測図同33年製版の図名「下弓削」で概ねカバーでき、これに同年代測図製版の図名「岩城村」及び「中庄村」を合わせ見ること、佐島・生名島・岩城島をカバーできる。

現在の地形図は2万5000分の1であるが、明治期の地形図は2万分の1となっている。弓削島付近の地形図には「藝豫要塞近傍 号」という表記が見え、「秘」の印が付けられている。造船所等、軍事関連施設のためであろうか、非売地図とされていたことがわかる。他の地域の地形図には「秘」の印は無く、「定価金7銭5厘」などと売価が記されているものが多い。いずれも刊行は「大日本帝國陸地測量部」となっている。

3. 現行地形図

現行の地形図は国土交通省「国土地理院」刊行であり、図名「備後土生」と「岩城」で弓削島・佐島・生名島・岩城島等がカバーされている。縮尺2万5000分の1、面数4,342面で日本全国をカバーしている。5万分の1地形図では1,291面である。

4. 地形図比較考察

明治期の旧版地形図と現行の地形図を比較して、明治期の測量技術の正確さに驚かされる。現在では空中写真利用による地形図の作製も行われているが、空中写真を利用出来なかった当時、三角点を基準として測量する三角測量だけでは困難を極めたと思われる。

新旧地形図を弓削島北部から見ると集落の表記が異なっている地域もある。現行地形図では「久司浦」であるが旧版地形図では「鯨」の文字が見える。

沢津集落と上弓削集落の間には上弓削の高浜八幡神社が鎮座しているが、その南に旧版地形図では「文」の記号が見える。この記号、明治24年以後は学校の記号として用いられていることから弓削小学校の前身であると思われる。(Fig. 1)

下弓削集落に目を転ずると、集落南にも「文」の記号が見える。明治31年測図同33年製版ということから察するにこれは明治34年創立の弓削商船の前身「弓削海員学校」ではなく弓削小学校の前身と考えたほうがよさそう

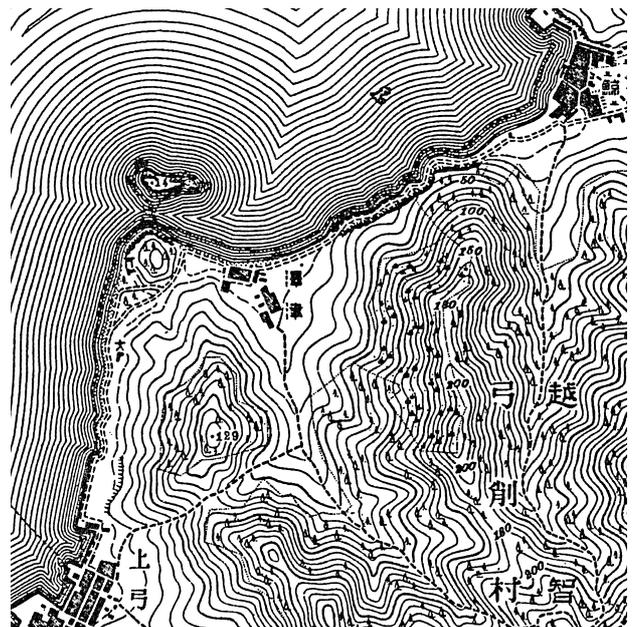


Fig. 1 旧版地形図 鯨・沢津・上弓削集落

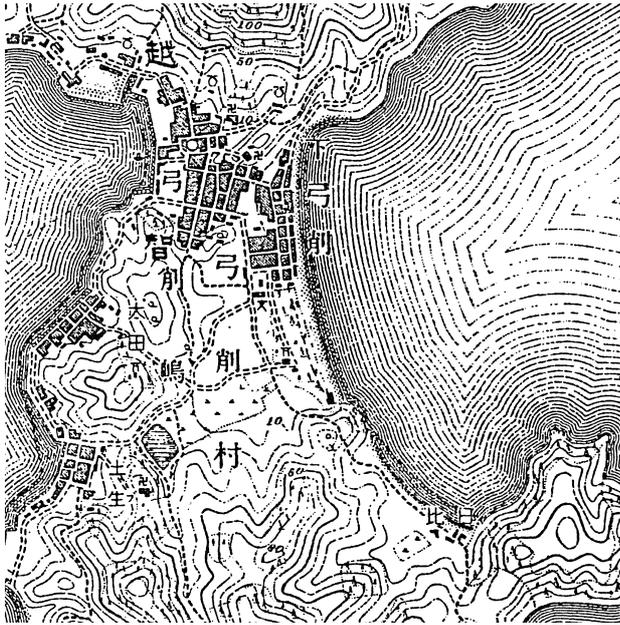


Fig. 2 旧版地形図 下弓削集落

である。(Fig. 2)

便船の航路も記されており、上弓削・下弓削から航路が引かれている。旧版地形図では下弓削から因島への直通航路は記されておらず、佐島の三ツ子島北岸そして佐島の西方寺北側から対岸の生名島へと航路が引かれている。現在では集落から集落へと航路が出来ているが、明治期には比較的に対岸距離の短い航路が選ばれていたことがうかがえる。

産業の様子を地形図から見ると、水田の記号が上弓削集落南側と下弓削集落南側に見え、その高位側には双方共に溜池が見える。鯨集落と日比集落にも小さな水田を認めることができるが、集落の大きさからみても島民を養うに十分な面積とは考えにくく、この他にも陸稲の作付けを考えることができる。四面を海に囲まれた島では食糧その他の物資輸送の面からも船を操る技術が熱望されていたと思われる。

寺社記号に目を移すと弓削島東岸、狩尾集落の狩尾山ノ神社、西岸の太田集落の太田山ノ神社は見えるが鯨集落の大森神社の記載は認められない。現行の地形図では大森神社は見えるが、太田山ノ神社の記号は認められない。

近隣の島での変化に目を配ると、生名島東岸の「敵島」は現在生名島と地続きになっているが、明治期には「島」であったことがわかる。

5. 空中写真

空中写真は地表面の姿がありのままに記録され、自然環境と人間の社会活動の様子が凝縮されており情報量が多い。昭和30年代後半からは国土地理院が国土全域の写真撮影しており地形図とともに有効な資料である。

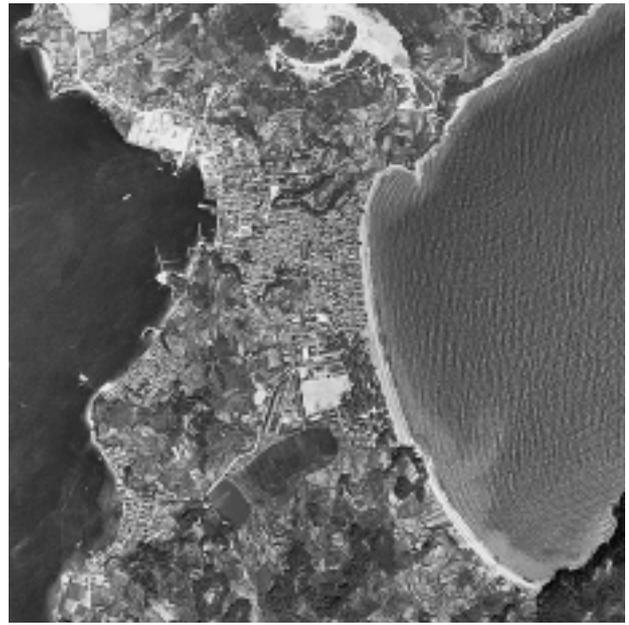


Fig. 3 空中写真 下弓削地区 昭和41年

終戦後の昭和22年から23年頃には米軍の撮影による空中写真があり、終戦後の地域理解に力を発揮する。

昭和41年8月、国土地理院撮影の空中写真(Fig. 3)からは高専昇格前の弓削商船全景並びに下弓削集落の様子、下弓削集落南側の水田も見える。原図では浜都湾の波模様まで読みとることができる。

昭和45年5月、国土地理院撮影の空中写真(Fig. 4)からは高専昇格後の弓削商船全景が見える。水田が消え、鉄筋建築の現在の校舎が現れている。弓状の美しい砂浜が見え、砂浜南の日比集落には移転後の白砂寮が見える。

平成11年5月、国土地理院撮影の空中写真(Fig. 8)現在の弓削島とほぼ同じであり、平成8年架橋の弓削大橋



Fig. 4 空中写真 下弓削地区 昭和45年



Fig. 5 米軍撮影空中写真 下弓削地区 昭和23年

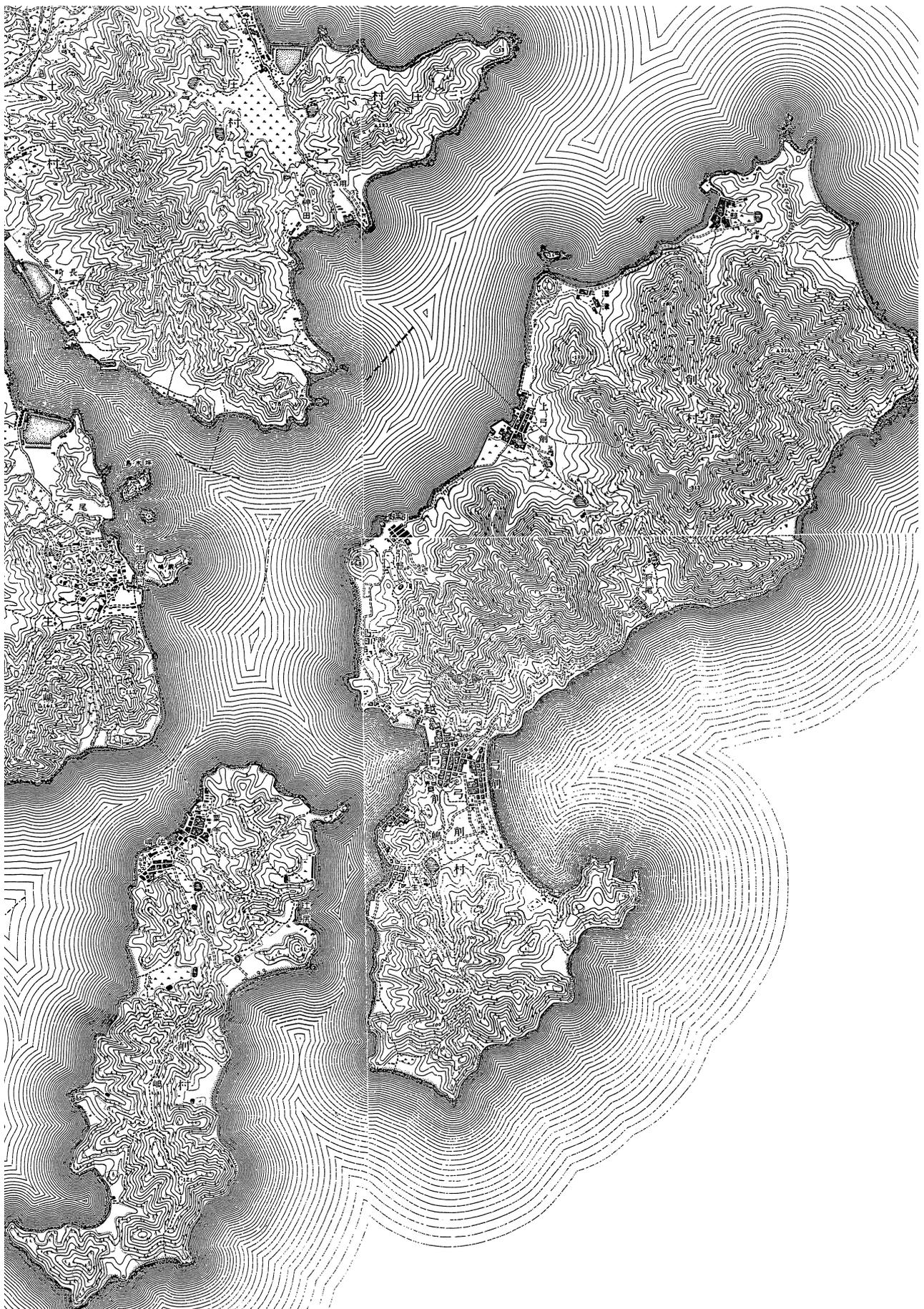


Fig. 6 旧版地形図 下弓削・百貫嶋・中庄村・岩城村

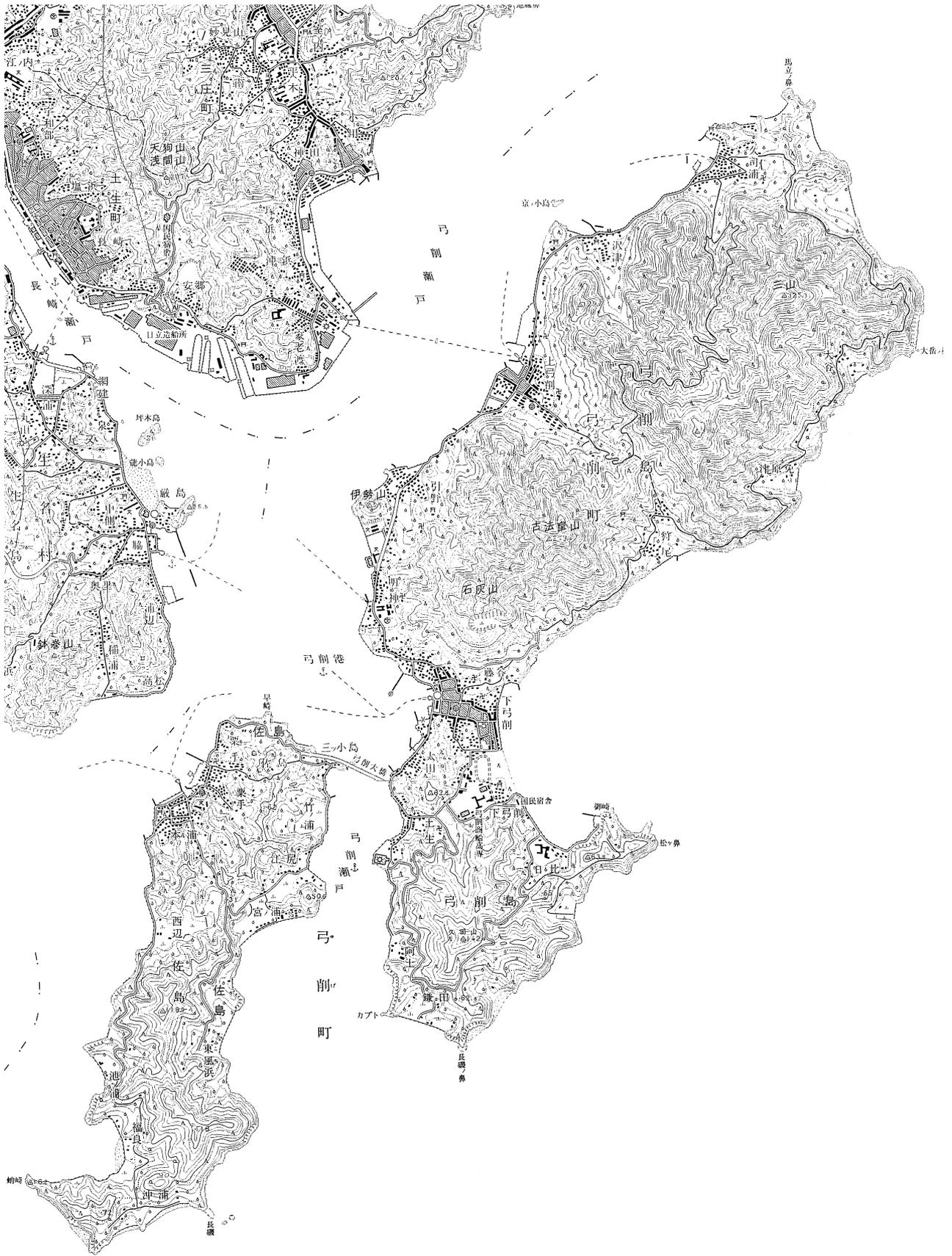


Fig. 7 地形図 備後土生・岩城



Fig. 8 空中写真 下弓削地区 平成11年

が見える。埋め立て等による海岸線の変化もみられる。

6.まとめ

国土地理院の旧版地形図をもとに弓削商船創立時の100年前の弓削島に遡る努力を試みた。旧版地形図はほぼ100年前に刊行されており、当時の地形・集落の範囲・土地利用その他についての情報を得ることができた。

空中写真では100年前の様子はわからないが、本校が高等学校から高等専門学校に昇格する前後に撮影が行われており、視覚的に変化の様子をとらえることができた。また、昭和23年に当時の米極東空軍によって撮影された空中写真で、今から53年前の弓削島の様子を伺い知ることができた。これらの資料をもとに更に47年、遡る努力をし、100年前この弓削島に「弓削海員学校」を創立させた当時の村民並びに関係者の熱意、尽力を感じ取り、21世紀の躍進に役立てなければならない。

参考文献

- 1) 吉田東伍, 大日本地名辞書, 第3巻 中国・四国 富山房
- 2) 弓削民俗誌, 弓削町, 1998
- 3) 国土地理院, 地形図
2万5千分の1 備後土生(平成11年5月1日)
岩 城(昭和61年12月28日)
2万分の1旧版地形図下弓削, 百貫嶋, 岩城村, 中庄村
- 4) 空中写真, 財団法人日本地図センター
写真番号 MCG 66 03X 00415

MSI 70 02X 002 18

MSI 99 01X 019 14

731 A 28 (米極東空軍撮影)

- 5) 日本歴史地名大系, 愛媛県の地名, 平凡社
- 6) 濱田隆士・中村和郎: 日本の自然, 財団法人放送大学教育振興会, 2001
- 7) 日本地名大事典 2. 中国・四国 朝倉書店. 1968
- 8) 日本地名事典 第3巻 朝倉書店. 1955
- 9) 国史大辞典 第14巻 吉川弘文館. 1996
- 10) 日本百科大事典 13. 小学館. 1964
- 11) 日本歴史大辞典 9. 河出書房. 1969
- 12) 私の日本地図, 瀬戸内海Ⅱ 宮本常一 同友館.